雁木通りの空間構造

SPACE STRUCTURE OF THE GANGI ARCADE

菅原 邦生*

Kunio SUGAHARA

Passage width changed with places where *Gangi* Arcade was built. This is the place of traffic or a trade activity and *Gangi* Arcade is not only used as a passage for pedestrians, but it is because width was decided according to the use situation under *Gangi* Arcade.

Keywords: Gangi, Gangi Arcade, Space Structure

雁木 雁木通り 空間構造

I. はじめに

雁木は、新潟県とその周辺地域において、主屋から道路側に下ろした庇を指す呼称である。同様の庇は他県にも見られ、青森・岩手・秋田の各県では小店(こみせ)と呼ばれる。

さらに近世文書には、「雁木(長岡・高田ほか)、小見世(弘前・久保田ほか)、小間屋(米沢)」などの呼称が確認できる。

雁木通りは、深雪地域の歩行者用の通路であり、雁木を設けた町家が連続することで形成される。近世文書には、「雁木通り(長岡)、雪道(久保田)、小間屋通り(米沢)」などの呼称が確認できる。

このように雁木および雁木通りは、地域によって呼称が異なるものの、いずれも歩行者用の通路として利用されることから、本研究では、雁木が町並みに連続し、通路機能をもつものを「雁木通り」と定義する。

これまで雁木通りの形成と衰退について検討し、以下の点を明らかにした¹⁾。

雁木通りの成立過程は、2類型に分けられる。

①城下町建設と同時期に、雁木通りが建設された場合には、藩命により、屋敷地に政策的に建設され、その後も通路機能が確保された。

②城下町建設に遅れて17世紀中頃以降には、本来建設が禁じられていたはずの公儀地である道路上に雁木通りが建設された。公儀地に建設されていた雁木通りは、19世紀以降、占有化された例が多い。いっぽう高田では、公儀地であった雁木下が私有地化されたにも関わらず、町の共同体的意識により²⁾通路機能が確保された。

さらに近代以降の雁木通りの整備過程については、

①明治初期においては、公有地における雁木通りが整備され、通路機能が確保された。雁木通りの公共的性格を行政が認めたためである。

②その後私有地における雁木通りが整備されたものの、後に占有化され、通路機能が損なわれた例がある。

雁木通りは、明治末期の大火や戦災、戦後の道路拡幅を契機として、衰退・消滅した例が多い。

本稿においては、雁木通りが建設された代表的な城下町を事例に、雁木通りの通路幅、雁木先の孫庇や水路、看板など、雁木通りの空間を構成した要素について、各地に残された文書・絵図などを基に検討する。

* 上越職業訓練協会 技師・博士(工学)

Association of Job Training in Joetsu, Dr. Eng.

表1 雁木通りの通路幅

呼 称	都市名	都市の人口	雁木が建設された町	町の機能	雁木の幅
小見世	弘 前	武 14,600人 町 6,600人	本 町、 龜甲町、 茂森町	市が開かれた町 市が開かれた町 市が開かれた町	1 間~9 尺 ¹⁾
小見世	久保田	町 15,237人	通 町	市が開かれた町	1 間余 ²⁾
雁 木	高 田	武 1,551人 町 17,906人	出雲町	宿駅機能を基盤とした町	6 尺 ³⁾
雁 木	糸魚川	不 明	大 町	宿駅機能を基盤とした町	6 尺 ⁴⁾
小見世	八 戸	町 4,557人	表 町	市が開かれた町	4 尺 ⁵⁾
			裏 町	職人町	3 尺 ⁶⁾
雁 木	松 代	武 1,800人 ~1,900人	紙屋町	職人町	3 尺 ⁷⁾

注番号は、根拠となる資・史料を示す。1)『奥民図彙』(『青森県立図書館郷土双書五』青森県立図書館、1973年)。2)『東遊雑記』(大藤時彦編『東遊雑記 奥羽・松前巡見私記 東洋文庫 27』平凡社、1964年。)3)『家作画図入』上越市立高田図書館館蔵。4)『町年寄御用留帳』個人蔵。糸魚川市役所編『糸魚川市史 4』糸魚川市役所、1979年に一部所収。5) 6) 前田利見『八戸藩史料 全』八戸郷友会、1929年所収の文政12年(1829)の大火後の『家作制限』。7) 享和13年の記録(個人蔵) 太田博太郎『信濃の民家』長野県文化財保護協会、1976年所収。都市人口は、雁木の幅を示す記録の年代に近いものを記した。また町が町人の人口を、武が武家の人口を示す。引用文献 弘前・久保田は、原田伴彦・西川幸治編『日本の市街古図【東日本編】解説』(鹿島研究所出版会、1973年)。高田は、『高田市史』1914年。八戸は、高島成信・三浦忠司『南部八戸の城下町』伊吉書院、1983年。松代は、米山一政『城下町をたずねて 20 松代』1976年。

Ⅱ. 雁木通りの幅

雁木通りの幅を表1に示す。これによると雁木通りの幅を決定した要因は、以下の2点を指摘できる。

①雁木通りが建設された場所の機能との関係

弘前と久保田の小見世は日市が開かれた町に形成され、幅は1間を越え、幅広であった。久保田城下の様子を描いた文化文政期(1804~1829)『秋田風俗絵巻』³⁾によれば、小見世前に設けられた仮設店舗とともに小見世下で商品売買の様子が描かれている(図1)。八戸の表町は廿三日町・十三日町・三日町など、多くの町で定期市が開かれており、文政12年(1829)の大火後の『家作制限』⁴⁾によれ

図1 『秋田風俗絵巻』にみる小見世下の商品売買

ば、藩は小見世の幅を4尺と定めた。この大火は、同史料によれば、八戸開府以来の大火とされ、小見世の幅は大火後の家作制限の一環として定められた。糸魚川の宿駅機能を基盤に成立した大町と、高田城下の南に位置する出雲町の雁木の幅は6尺であった。出雲町は伝馬町であったことから、雁木下が馬の荷物の積み下ろしなどに利用されていたものと考えられる。

松代は、享保13年(1728)の紙屋町の記録に⁵⁾、

五間三尺町幅、右町幅之内六尺がんぎ下

とあり、紙屋町においては、道幅5間3尺の内、6尺を雁木通りの敷地とした。

東西に延びる紙屋町通りの北側に位置する、18世紀末から19世紀初めにかけて建てられた相沢家と、通りの南側に位置し、幕末頃に建てられた柿崎家には、建築当初から、それぞれ3尺幅の雁木が確認される⁶⁾。

よって幕末においては、紙屋町通りの両側に3尺の幅をもつ雁木通りが建設されていた。紙屋町は、紙すき業を生業とした職人町であった⁷⁾。さらに八戸の裏町は、大工・鍛冶などが居住する職人町であり、文政12年(1829)の大火後、藩は小見世の幅を3尺と定めた⁸⁾。

以上のように雁木通りの通路幅は、市が開かれた町が最も広く、宿駅機能を基盤とした町が続き、職人町は最も狭い。

②都市の人口との関係

雁木通りの通路幅は、人口の多い方が広い傾向にある。これは人口が多い方が、雁木通りにおける人々の往来が活発であったためであろう。そのため、市が開かれた八戸の表町より、宿駅機能を基盤に成立した高田の出雲町の方が、幅広の雁木通りが建設されたものと考えられる。

Ⅲ. 孫庇の設置

雁木先には、公儀地である道路にもかかわらず、孫庇が張り出すなど私的に利用されていた。ここでは道路に張り出した孫庇などの実態を明らかにする。

1) 孫庇の設置状況

a) 米沢における板庇の設置

米沢では、『石田名助記録』⁹⁾享和3年(1803)2月条によれば、公儀地である道路上に、3尺1寸5分(半間)の幅ではみ出していた小間屋通りの存在が知られ、さらに同記録には、

附、板庇老尺七寸五分ニテ平常懸置候ハ用捨、御上御通行之節ハ相はつすへき事

とあり、道路上の小間屋先には、孫庇が設けられ、藩主が通行する際には、取り払われた。通行の妨げとなったためであろう。

b) 糸魚川における小庇の設置

文化6年(1809)2月29日の町年寄の申渡には¹⁰、

町々小庇の儀、仰せ渡されの儀、承知つかまつり候へども、四十物師ども日受けに相なり候ては、難渋つかまつり候間、何とぞ庇の儀、御免なし下され候様願ひ申し出で候とある。小庇とは、雁木先の孫庇のことであり、「四十物師」とは、肴屋である。魚に日があたって腐ることを防ぐために、雁木先に小庇を設けていたことが分る。

同年7月の町年寄小林与一郎の記録¹¹によれば、藩主松平直春の初入国に備えて、

前々引被仰渡候、四十物師共商売方寄小庇之義ハ、勿論、(中略)残ら須取片付置候様被仰渡候

とあり、肴屋の雁木先には小庇が設けられ、その撤去を藩が指示した。藩主入国の際の通行の妨げとなったためであろう。

c) 長岡における小雁木の設置

享保年間(1716~1735)の記録には¹²、

肴屋・青物屋ハ水取扱候ニ付、小かんき御免之事トアリとある。肴屋と青物屋に限っては、小雁木(雁木先の孫庇に庇柱を立てたもの)の設置を藩が許可した。店先における商品の加工・販売に利用されたものである。

さらに降雪期の城下の様子を描いた安政3年(1856)の『雪之図絵巻』には、幕末において下級武家地が町人地化した同心町における雁木先の小雁木が描かれ、小雁木下には、野菜などが置かれ、売買される様子が描かれる¹³。

2) 孫庇設置の要因

以上のように、孫庇は職種によって設置が許可される場合など、原則的には、条件付きではあるものの、公儀地である道路上への張り出しが認められた。これは雁木通り同様、公儀地である道路上への張り出しを、藩が追認した結果と考えられる。

IV. 雨落・水路の設置

雨落は建物の雨水処理などに利用されるため深さが浅く、水路はそれ以外の用途にも利用され、石積などで作られ深さが深い。

1) 雨落・水路の設置状況

a) 弘前における小見世先の水路

天明8年(1788)刊『奥民図彙』には、本町の商家における落し式の小見世の様相が描かれている。商家の小見世の前には、降雪期の雪捨てに利用されたと思われる幅広の水路が設けられている¹⁴。

b) 八戸における小見世先の水路

文政12年(1829)の大火後には、それまで表町の道路の片側にしかなかった小見世前の水路を、防火用水としての効果を上げるため、両側に設けたとされる。この水路は、慶応元年(1865)には、裏町の片側の小見世先にも引かれた。水路は、表町の廿八日町・十八日町・八日町・三日町・十三日町・廿三日町・荒町・新荒町、裏町の十六日町・六日町・朔日町に引かれた。よって幕末においては、表町のほぼ全域と裏町の一部において、小見世先に水路が設けられていた¹⁵。

c) 山形(現在の山形市)における雁木先の水路

幕末の城下の様子を描いた『湯殿山道中版画』¹⁶によれば、小間屋先に水路が描かれている。

d) 糸魚川における雁木先の雨落

文化13年(1816)には雁木先の雨落が確認できる。この雨落は、文化13年(1816)の大火後の町並整備にともない整備されたものである¹⁷。

2) 雨落・水路設置の要因

雁木先の雨落・水路は、雁木の雨水処理ならびに降雪期における積雪の処理や防火用水など様々な目的で設置されたものである。

V. 建具の設置

1) 建具の設置状況

a) 弘前の戸障子

小見世先の建具については、宝暦8年(1758)の記録によれば、当時、小見世柱には、吹雪を防ぐため冬期間に限り、採光用の雨障子(油紙を貼った障子)をはった戸障子がはめられていた。天明8年(1788)『奥民図彙』の挿し絵にも、菓種店の前に設けられた小見世柱の間には戸障子がはめられ、障子には大きく「菓種」と書かれている¹⁸。

b) 黒石の戸障子

仲町に現存する宝暦13年(1763)に建築された高橋家には、小見世柱の間に戸障子が設けられている¹⁹(図2)。黒石では小見世先の戸障子は「しとみ」と呼ばれる。

c) 長岡の落し板

幕末の城下の様子を描いた『懐旧歳記』²⁰によれば、雁木柱の間に落し板がはめられている様子が描かれている(図3)。

図2 黒石のしとみ

図3 長岡における雁木先の落し板

2) 建具などの設置要因

弘前・黒石の戸障子は上戸・下戸にわかれ、上戸には採光用の雨障子が入れられていた。いっぽう長岡では、建具が入らず、雁木柱に溝を掘って板を落とし込んだ。いずれも道路から雁木内に雪が入ることを防ぎ、安全な歩行空間を確保するためのものである。

VI. 看板

a) 米沢における小間屋の看板

米沢は、小間屋に設けられた看板の設置も規制の対象であった。まず『石田名助記録』²¹ 安永8年(1779)条には、
来ル五日駿河守様御着之筈ニ候(中略)ひさしの儀ハかんぱん共ニ取不申候
とある。「ひさし」については小間屋先の板底の可能性が高い。また米沢新田藩主上杉勝承の城下通行に際しては、看板は取り払わなくてよいとされた。よって看板は、小間屋柱に取り付けられ、道路上に張り出していたものと考えられる。

さらに同書享和3年(1803)2月条によれば、小間屋部分の看板

について、

看板相立候事 道奉行迄願上売弘候内可相立候事

但、御上御通行之節ハ可相仕廻候事

とある。藩主の城下通行の際には、看板が取り払われた。

同書文化元年(1804)条には、

右ハ何年中何売買何レ之詔を以致置候哉相印

(中略)

一、看板何之売弘

右ハ何年中何相立候哉相印

とあり、看板の設置状況を調べるよう、藩が検断に指示した。その返答として、東町の検断石田吉三朗の同書同年4月4日条によれば、

一、三間囲込 酒屋小嶋弥一郎

一、小間屋之内、西ノ方三尺鋪理 同人

(中略)

一、看板 酒・みそ 同人 何年中何相立候哉 覚無御座段申事ニ御座候

何年中何相立候哉 覚無御座段申事ニ御座候

一 看板 蛸そく・みそ 小間物 植木彦右兵衛

一、醤油・みそ 看板 鈴木久五郎右ハ天明六年中道奉行所へ伺之上相立申候 且御上御通行之節ハ取不申様場所御差図を受相立置申候由御座候

とあり、酒・みそ・醤油・ろうそくを扱う店が看板を出していたことが確認できる。また藩主通行の際にも藩の許可を得て、看板を取り払わなくてよい場合もあった。

b) 弘前における小見世先の看板

弘前の小見世先の看板については、文化10年(1813)の記録によれば、小見世柱には、家業や借家人の名前が書かれた看板が取り付けられていた²²。

以上のように雁木柱には看板が設けられ、看板には家業などが書かれていた。米沢では、全ての商家に看板があったわけではなく、趣向品や生活必需品などを売る店に設置されていた。

Ⅷ. 定期市と雁木

a) 米沢における定期市と小間屋の縁板

米沢では、江戸中期になると六歳市が廃れ、盆・正月と十月に日市が立つようになった。十月の日市は、元和年間(1613~1617)に六町が伝馬・徒夫役を務めるかわりに認められたものであった。日市の開催に際し、『石田名助記録』文化13年(1816)11月2日条によれば、

組頭中

右申渡候所喜左衛門又小間屋無之与申、源右衛門縁板無之与申三尺迄右ニ付無抛大工遣ならし入遣候事 源右衛門無之与申三尺迄 右ニ付無抛大工遣ならし入遣候事朔日ニ宿場罷越四軒ニ而間合申由且又喜左衛門見世ニ用立不申段申ニ付延引致候事

とあり、「右申渡候所」とは、日市の開催準備を示し、その一環として小間屋のない場所に小間屋の建設を指示した。また喜左衛門宅では、金銭的な目途が立たず小間屋の建設を延期したとある。また源右衛門宅においては縁板の張り出しが3尺とある。『石田名助記録』享保2年(1803)条では、小間屋の幅は3尺1寸5分であることから、小間屋下には、その幅に合わせて縁板が張りだされていたもの

図4 長岡における定期市の様相

と考えられる。この縁板は、日市の際、商品の売買などに利用されたものであろう。

b) 長岡における定期市と雁木下の売台

安政3年(1856)『雪之図絵巻』²³には、裏一之町入口の市の立つ日の様相が描かれる(図4)。裏町の雁木通りは、公儀地である道路上に建設され、市の際には、雁木下に商品を置く台が設けられ、雁木通りも商品売買の場として利用された。以上のように雁木通りは、公儀地である道路上にも関わらず、定期市の商品売買など、商業機能を有していた。

Ⅷ. おわりに

以上を総括する。雁木通りの幅は建設された場所によって異なり、市が開かれた町が、宿駅機能を有した町や職人町よりも広がった。これは雁木通りが、単なる歩行者用の通路として利用されるだけでなく、18世紀後半以降、市の開催場所としても利用されるなど、商業活動の場であったためである。また市日の際には、雁木下に商品を売るための台などが設けられる場合もあった。雁木先には、公儀地である道路上にも関わらず、孫庇や看板が設けられ、雁木先の道路上には、雁木の雨水処理のための雨落や、消雪などにも利用される水路が整備された。

以上のように雁木下の空間は、通路以外にも多様な機能をあわせもっており、この多様性は、私の中から公共の空間が、あるいは公の中から私有の空間が創出されるなど、公と私の微妙なバランスの上に成立した雁木通りの特質である²⁴。

注)

1 菅原邦生・波多野純『近世における雁木通りの建設整備過程』日本建築学会計画系論文集 494号、1997年4月。菅原邦生・波多野純『近代における雁木通りの整備過程と衰退過程』日本建築学会計画系論文集 506号、1998年4月。(以上は日本工業大学教授波多野純氏との共同研究)。菅原邦生『近世における雁木通りの権利形態と利用実態』日本建築学会計画系論文集 559号、2002年9月、『近代における雁木通りの権利形態と利用実態』日本建築学会計画系論文集

567号、2003年5月がある。

2 注1前掲『近世における雁木通りの建設整備過程』pp221~228。

3 秋田県立博物館蔵。

4 高島成侑・三浦忠司『南部八戸の城下町』伊吉書院、1983年p168ならびに、前田利見『八戸藩史料 全』八戸郷友会、1929年所収、p564。文政12年(1829)の大火後の家作制限。「表町 建揚十四尺 前面柱にて熨斗葺 小見世四尺」。

5 浦野氏蔵。太田博太郎『信濃の民家』長野県文化財保護協会、p486、1976年所収。

6 前掲『信濃の民家』pp480~483。

7 前掲『信濃の民家』p448。

8 文政12年(1829)の大火後の家作制限。「裏町 建揚十二尺 小見世三尺」。

9 『石田名助記録』享和3年(1803)条(『米沢市史 資料篇3 近世史料2』1984年)。

10 糸魚川市役所『糸魚川市史3』糸魚川市役所、1978年所収。

11 『糸魚川市史 資料篇1 文書編』糸魚川市役所、1986年所収。

12 長岡市史編集委員会近世史部会編『長岡市史双書No.23 長岡藩政史料集(4) 長岡平蔵収集長岡藩史料』(長岡市、1992年)、p60。

13 注1前掲『近世における雁木通りの建設整備過程』pp221~228。

14 注1前掲『近世における雁木通りの建設整備過程』pp221~228。

15 注3前掲『南部八戸の城下町』、p323。

16 文化文政期(1804~1829)『湯殿山道中版画』(山形県立博物館蔵 『江戸時代図誌 第8巻 奥州道二』筑摩書房、p127、1977年に一部所収)

17 注1前掲『近世における雁木通りの建設整備過程』pp221~228。

18 注1前掲『近世における雁木通りの建設整備過程』pp221~228。

19 鳴海静蔵『黒石の小見世について』黒石商工会議所商業活性化委員会、1992年ほか。

20 『懐旧歳記』(『日本都市生活史料集成 五 城下町篇Ⅲ』学習研究、1976年所収、p516~563)。長岡藩士であった小川当知(善右衛門)が実見実写により描いた絵図である。

21 注9前掲所収。

22 注1前掲『近世における雁木通りの建設整備過程』pp221~228。

23 『雪之図絵巻』(吉田光邦編『江戸時代図誌 第13巻 北陸道二』筑摩書房、p155、1977年)に一部所収。

24 近年雁木通りを生かした町づくりが盛んになってきている。例えば幅についてみると、新潟県上越市高田や新潟県糸魚川市など多くの町で一律幅広にとる傾向がある。商店街の人通りに対応するためと考えられるが、近年の経済情勢悪化の中、商店街の人通りは当初の計画を下回り、町の機能に応じた幅となるよう工夫する必要がある。それが引いては生活空間の延長としての雁木通りの保存につながるものと考えられる。いっぽう青森県黒石市は、仲町を中心に小見世通りの保存整備が進められ、江戸期以来の小見世の幅を踏襲しており、注目に値する。

(2003年4月10日原稿受理、2003年10月15日採用決定)